ユネスコスクールとしてESDを通して子どもを育てる特認校づくり

学校名：石狩市立生振小学校

校長名：安部　紀江

担当者：教頭　玉腰　武

１．趣旨・本校のESDの特徴
①学校田活動（学校田を活用した年間を通してのもち米栽培活動）
②世界寺子屋運動（書きそんじハガキを回収し、石狩ユネスコ協会へ）
③世界寺子屋運動（ユネスコファームで栽培した作物を販売し、売上金を石狩ユネスコ協会へ）
④年間指導計画にもとづく教育課程全体でのESD
（教科、道徳、特別活動、外国語活動、総合的な学習の時間）

２．活動・全体計画
■〈学びと学びをつなぐ〉
○ＥＳＤカレンダーの見直しを行い、各教科等における単元のつながりを明確にする。
○ＥＳＤカレンダーで関連を図った各教科等の年間指導計画やその単元（題材）の指導計画を作成する。
○児童の主体的な学びとなるような学習のプロセスを重視した授業を構築する。
■〈子供と子供をつなぐ〉
○異学年交流による体験的な学習を重視し、学校田活動、世界寺子屋運動（書きそんじハガキ回収・ユネスコファーム活動など）、追究学習（教科横断的な学習）などを計画的に位置付ける。
○自他のよさに気付くことができるように、自分の意見を発表したり、感想を交流したりする場面を意図的に設ける。
■〈子供と地域をつなぐ〉
○地域の教育資源を有効に活用できるように、人材等の発掘及びリスト化を図る。
○学校田活動、世界寺子屋運動（書きそんじハガキ回収・ユネスコファーム活動など）、追究学習（教科横断的な学習）などを通して、学んだことを身近な人に広める発表の場を設定する。
■〈子供と未来をつなぐ〉
○よりよい未来を実現するために、自分ができることを考えさせたり、考えたことを具体的に行動させる機会を設けたりする。

３．活動事例**「持続可能な学校田活動」**
■ねらい
かつては、本地区の農業の中心であった稲作だが、近年の厳しい状況を反映して、校区の農家の多くは近郊型の蔬菜（そさい）栽培に移行している状況がある。本校では、地域住民の絶大なるご支援のもと、学校田活動を２７年間続けてきたが、ESDがめざす次世代の担い手づくりのために、必要な価値観や能力を育むことが教育実践において極めて重要であると考えている。
「つくる」「育てる」「食べる」という一連の体験を通して、郷土を愛する心および食に関する適切な思考力・判断力を育てたいと考える。
■「つくる」「育てる」「食べる」
①農業体験（栽培活動）を通した豊かな心の育成
②「ふるさと　生振の稲作」について学ぶことによる地域理解の深化
③地域の特色を生かした体験活動の重視（ユネスコファーム活動も含めて）
④栽培した野菜や米等を調理して食べることと関係者との交流（食育）
⑤農業関連の地域環境の保全
■「３年生振農業探検隊！」（総合的な学習の時間、社会科）
①地域農家を訪ねての調査活動（米、野菜）
②稲刈りの直後に、刈り取った稲の乾燥体験
③「もちができあがるまで」の調査活動（地域住民、保護者、学校関係者）

もみまき２８．４．２２

田植え２８．５．２３

稲刈り２８．９．５

もちつき２８．１２．３

もちつき２８．１２．３

ユネスコファーム活動（カボチャ販売）
２８．１２．３

４．成果と課題

■成果

①食を含め、農業（稲作、畑作）を一体的に学ぶことで、自然や地域を理解し愛する心が養われつつある。
②地域の特色を生かした体験活動を通じた学習の深化が図られている。
③ＥＳＤカレンダーで関連を図った各教科等の年間指導計画や各単元（題材）の指導計画を作成することにより，ＥＳＤの視点による「学びのつながり」が明確になり，効果的に教科横断的な学習を進めることができた。

■課題

①自然や郷土を理解し愛する心の育成と地域のために活動できる態度をさらに醸成すること。
②子ども相互（異年齢含む）の人間関係の形成を促進し地域内外の新たな事象を知ることで、視野の拡大を図ること。
③６年間を見通した系統的な学習が一層充実するよう，児童の学習状況の評価を踏まえ，学習内容や学習方法の見直しを図ること。